

ヴァナキュラー建築学における「文脈」と 景観・土木研究への接続可能性

中村 優子¹

¹ 学生非会員 M.Arch. in Urban Design Ph.D. Candidate in Architecture, Buildings-Landscapes-Cultures Program, School of Architecture and Urban Planning, University of Wisconsin-Milwaukee (2131 E. Hartford Ave., Milwaukee, WI 53211, USA, E-mail: nakamur4@uwm.edu)

本稿では、20世紀後半より北米を中心に発展してきたヴァナキュラー建築学の成り立ちを整理しながら、本分野における「文脈」の重要性について議論する。その上で、米国ウィスコンシン州ミルウォーキーにおける飲食店 Boulevard Inn を例にとり、ヴァナキュラーな建築行為とその「文脈」の分析を簡単に例示する。最後にこの例に基づき、本分野の景観・土木研究への接続可能性を指摘する。

キーワード：ヴァナキュラー建築, 北米, アメリカ, *vernacular architecture*

1. 本稿の目的

北米には1980年より Vernacular Architecture Forum (VAF) という研究者・専門家団体が存在し、これを中心に vernacular architecture studies (ヴァナキュラー建築学) が専門分野として確立されてきた。しかし本分野は日本においてほとんど認知されていない。さらに、“vernacular”は「土地固有の」“architecture”は「建築」と一般に訳され、限定的な空間スケールを連想させるため、これを研究対象とするヴァナキュラー建築学は大きな空間スケールを想起させることの多い「景観」との関連が低いように思われがちである。本稿では、ヴァナキュラー建築学におけるスケールの取り扱いを議論しながら、その景観・土木研究との接続可能性を指摘する。

2. ヴァナキュラー建築学とグローバル社会の土地固有性

(1) “Vernacular”の語源

Oxford English Dictionary によれば、“vernacular”という英単語はラテン語の“vernāculus”という語に基づく。この“vernāculus”は、外から連れてこられた奴隷に対して主人の家で生まれた奴隷を意味する名詞“vernus”（男）・“verna”（女）の派生語である。同辞典によれば、英語において“vernacular”という単語が初めて使われたとされるのは1601年で、“A vernaculer pen-man [...] hauing translated them into English.”（原文ママ）という文章においてである。

¹⁾ この文章では“vernacular”という形容詞が現地語話者と当時のリング・フランカの話者を区別するために用いられている。つまり、“vernacular”という単語・概念は全世界的な事物に対する対義語・概念として用いられていた。この最初の用法の出現したの

が大航海時代という人・モノ・情報の移動が全世界的に加速し始めた時代であったことは注記に値する。このグローバル社会の幕開けとも言える時代において、土地固有の事物を全世界的な事物と区別し、異質性を強調することで価値・意味が創造されていたことをうかがわせるからである。つまり“vernacular”であること＝土地固有性とは、他の場・土地との比較・区別によって初めて成立した概念だと言える。

(2) “Vernacular architecture”の定義

普遍・全世界的な事物に対する概念としての“vernacular”を扱うヴァナキュラー建築学は、比較的明確な土地固有性を有した建築物以外にも研究の対象としてきた。もちろん、大航海時代以上にヒト・モノ・情報の移動が加速する現代社会においても容易に連想可能な土地固有の建築現象は存在する。卑近な例では日本の町屋などが該当するだろう。また本分野は北米中心に発展したこともあり、初期においては欧州系移民にまつわる民家の建築技術の伝播を扱うものが一つの主流として存在していた。²⁾ しかし、様々な“vernacular architecture”の定義のなかで最も簡潔なものの中の一つによれば、ヴァナキュラー建築とは“the common building of a given place and time (任意の時と場におけるありふれた建築物)”であるという。³⁾ また本分野の重要文献を集めた論文集では、「ありふれた」のほかによく用いられる形容詞として“ordinary (普通の)”，“everyday (日常生活の)”，“commonplace (ごく普通の)”が挙げられている。⁴⁾

ヴァナキュラー建築学の研究者・専門家たちは建築における土地固有性を、場・土地という環境的文脈や限られた技術的・物質的資源につよく左右された結果の反応として再解釈したと言える。「固有」と「普通」は一見正反対の概念のように思われる

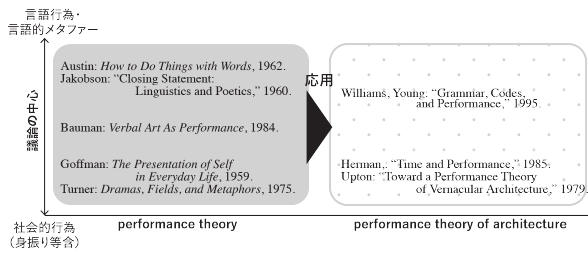


図-1 performance theory と performance theory of architecture の関係。

が、この意味において通底している。結果としてヴァナキュラー建築学は、ある土地にとって庶民的で、日常生活に根ざしており、ごく普通であるがゆえに本来ならば「建築」に分類すらされない建物・構造物に関することを扱う分野となっている。

建築評論家の Rudofsky は VAF が組織化される以前に、ヴァナキュラー建築が「半本能的な外界への反応」とつながっていることを指摘した。⁵⁾ ある特定の場・土地で使用可能な資源（資材、知識、技術）を利用した外界への半本能的な反応としての建築行為・現象をヴァナキュラー建築と見なす姿勢は、前述のように現在のヴァナキュラー建築学に受け継がれている。そして人・モノ・情報の移動が加速する現代社会においては、その土地固有的な建築現象の基盤となる場・土地とはなにか、Rudofsky の言葉を借りれば「外界」とはなにかをまず問う必要がある。古くは人や事物の移動が緩やかであったために、建築現象においては空間的制約が現代よりも強く作用していた。結果として、その土地に豊富な材料を用い気候に適した方法で建設環境を構成することが普通であり、日常生活の一部であった。空間デザインはそのような環境に半本能的に反応した結果として表出し、これがヴァナキュラー建築とされてきた。しかし、より複雑な事象の結節点として場・土地が生成される現代では、「外界」としての場・土地そのものが所与ではなく絶えず生成されている。よって、ヴァナキュラー建築学においてはこの「外界」を理解することが重要な事項の一つであり、この「外界」と建築現象・行為の関係性を理解するための分析の枠組みとして登場したのが、performance theory of architecture（建築演技理論）であった。

(3) 「外界」・「文脈」の生成：建築演技理論

建築演技理論は、1950年代末以降に発展した Goffman を中心とする performance theory（演技理論）を空間に応用させた考え方である（図-1）。⁶⁾ 1970年代末よりヴァナキュラー建築学界隈で議論され始めた本理論は空間改変を表現行為（演技）、空間使用者を観衆と捉えることで、デザインにおいて伝統的に行為者とされてきた所有者（施主）・建築家・建設業者だけでなく使用者の媒介性を考慮できる分析の枠組みを提示した。⁷⁾ この元となった演技理論は、演技における situation（状況）・context（文脈）の重要性を強調している。これは、演技は

台本にそって演者の意図通りに行われているように見えながら、実際は観衆やその他偶発的事象が作り上げる状況・文脈に多分に左右されているという考え方に基づいている。建築演技理論はこれにならう形で、建築行為にとっての状況・文脈である場・土地・「外界」の生成を通じて、従前の行為者である施主・建築家など以外の意向や影響が空間デザインに介入する可能性を指摘した。

3. ヴァナキュラー建築の文脈：Boulevard Inn (Milwaukee, Wisconsin, USA) を例として

(1) Boulevard Inn：建築演技の事例として

Boulevard Inn は米国ウィスコンシン州ミルウォーキー市に存在していた、いわゆる「地元の名店」の一つである。1946年、ドイツ系移民2世が市西部に開店したこの飲食店は子孫に受け継がれ、市東部への移転を経て2003年に3代目が閉店を決めるまでこの一族によって経営された。その間、多くの市民によって市外からの来客をもてなす場、祝い事の場として用いられ、市民に“the place to go（行くべき場所）”として親しまれた。⁸⁾

Boulevard Inn は、ヴァナキュラー建築学が対象とする「どこにでもある」建築物・場所の一例である。この飲食店が入居してきた建物は、建築様式的に特筆すべき点があるわけではなく、有名建築家によって設計されたのでもない。そもそも初代店主は Boulevard Inn 開店に際して売りに出ている物件を購入し修繕加えたが、建築時の設計者・施主ともに定かではない。また、地元の歴史建物として登録されるなど、歴史的価値が公式に認められているわけでもない。⁹⁾

しかし、過去の地元新聞やオーラル・ヒストリーによって市民の記憶を読み解けば、それぞれの個人の空間体験の中でこの飲食店が多様な意味を持っていることが見えてくる。ある人は結婚式の思い出の場所として、記念日の祝いの場として、毎日昼食を摂る場所として、それぞれの生活の中で Boulevard Inn を訪れた。¹⁰⁾ ヴァナキュラー建築はこのような建築物・場所に目を向けることで、ミルウォーキー市やこの飲食店が存在した特定の地域・近隣住区を“lived space（生きられた空間）”，または単なる三次元的な“space（空間）”に対して意味を持った“place（場所）”として描き出すことを強みの一つとしている。この点において、カルチュラル・ランドスケープ研究、文化地理学における場所研究などと親和性が高い。¹¹⁾

(2) ヴァナキュラーな建築行為と文脈：移転と改築

同店主（初代）の経営による飲食店は、別名ではあるが1936年頃から市内東部に存在した。これを含めると、この一族の経営による飲食店はおよそ70年間にわたって市内で営業し、計3回の移転を

表-1 Boulevard Inn に関する年表.

年代	Boulevard Innの主な出来事	社会の出来事
1929		米国の恐慌始まる
1930年代前半	初代Albert Gaulke, 飲食店に乳製品を納入する業者の会計係に就きながら、倒産した飲食店の機器を買い集める	
1936頃	市東部に飲食店Chesterfield Grillを開店	
1938頃	市中心部に2店舗目Gaulke's Coffee Shopを開店	
1930年代末	2店舗目の経営が軌道に乗り、1店舗目を当時の支配人に任せて2店舗目の経営に集中するようになる	恐慌期終わる
1945		第二次世界大戦終戦
1946	3店舗目となるBoulevard Innの物件を市西部で購入、移転(2店舗目は閉店);後に初代の娘婿・2代目となるWerner Strothmannが動き始める	
1950	店舗の南部分にあったガーチを廃止、屋内とする	カリフォルニア州で全米初の自動車排気ガスに対する規制
1965	店舗東部分にパティオ建設	連邦政府による初の自動車排気ガス規制
1967	後に3代目となるWenerの息子Gary Strothmannがサラダ係・皿洗いとして働き始める	
1968	2代目Wernerの経営となる	
1970年代	改築は少なくなるが、メニューの変更を多く行うようになる	連邦政府による排気ガス規制に修正条項, 排気管基準を盛り込む
1991	3代目Garyの経営となる	
1992	Boulevard Inn市東部(中心部近く)に移転	
2003	店を売却, Boulevard Inn閉店	

行ったことになる。また、そのうち最も長く(1946～1992年)留まった3つ目の土地、つまりBoulevard Innとしての最初の土地においては、市に対して48回もの改築申請を行った。以下ではこれらの移転・改築行為を建築演技と捉え、その文脈を読み解いてみたい(表-1)。

a) 移転

まず一例として、2回目の移転を検討してみる(図-2)。この移転は第二次世界大戦後まもなく、市内中心部から「郊外」と呼ばれる地域への移転であり、初代店主はこの移転に際してBoulevard Innと名を改めた。3代目店主(初代の孫)によれば、この移転は「家族志向の」地域への移転を求めてのことだったという。大戦から帰ってきた男性らは、戦中に中心部で仕事に就いていた女性らと結婚し、子を持ち、郊外に家を買いはじめた。これは米国都市において一般的な戦後郊外化のパターンである。¹²⁾ 初代が中心部において1938年頃から経営していた飲食店はGaulke's Coffee Shopといい、中心部で働く女性を主要顧客として含んでいた。基本的には、店は郊外に転居する顧客を追う形で移転を考え始めたということになる。

その後およそ50年にわたって留まることになるこの市西部の土地が、1946年の時点で店にとって「理想的」な環境となってきた過程を解きほぐすことが、移転という建築演技にとっての文脈の生成過程を検討するということである。文脈の生成要因を網羅的に挙げるよりも、例としてこの土地のいわゆる「地の利」がどのように形成されたのかを考えてみると、その歴史は特に河川によって形成された微地形にまで遡ることができる。19世紀前半に欧州系移民が住み着くまで、ミルウォーキーは主としてネイティヴ・アメリカンによって住まわれていた。

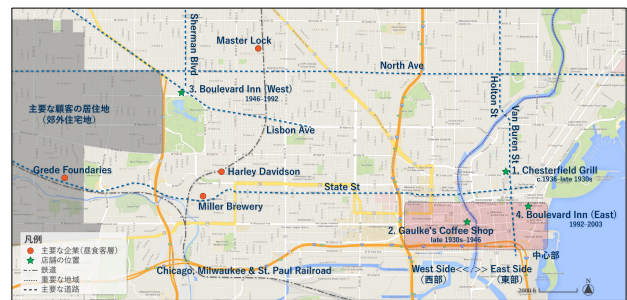


図-2 Boulevard Innの移転に関する地図。GoogleMaps上に筆者が作成。

ネイティヴ・アメリカンは河川によって形成された微地形に沿ったルートを移動のために使用しており、それが小道となっていた。この小道は後に入植が進むにつれて大通りとして開拓され、舗装され、市内を結ぶ路面電車・中西部の産業都市を結ぶ鉄道・ひいては高速道路のルートとなった。¹³⁾ Boulevard Innが移転を考え始める頃、鉄道沿線にはすでにHarley-Davidsonをはじめとする製造業の大企業が集中し、路面電車沿線には中小商店が軒を連ねていた。初代は移転先の西側に広がる郊外住宅地からの家族客の他に、これら企業からの昼食客を見込んで移転先を決定したという。

ただ若い家族が多く暮らす郊外住宅地というだけでなく北部・南部にも候補多く存在していた。しかし長い時間をかけて形成された「地の利」によってBoulevard Innはこの土地に引き寄せられ、その後50年近く留まることになった。このように、ある飲食店が戦後に郊外移転したという出来事を長期的文脈のなかに位置づけることで、一見瑣末な建築行為を市・州・地域の開拓史、自然史、交通史などに接続する可能性が開かれる。

b) 改築

もう一つの例として、1946～1992年に3番目の土地、つまり市西部の土地で行われた改築行為のうち、屋外飲食空間の改変を検討してみる。移転直後、もとの建物の南部分にはテラスが存在し、屋外飲食が可能になっていた。しかし1950年、初代が行った改築でテラスはふさがれ、屋内空間とされた。一度は消滅した屋外飲食空間だったが、1965年に初代・2代目が共同増築を行った際に東部分に再度パティオとして出現している(図-3, 4)。¹⁴⁾

このように時代によって屋外飲食空間を廃止・復活させることを建築演技と捉えると、この演技を要請した文脈を生成していたものの一つは顧客の嗜好であった。店主・店員らは日々の顧客との会話の中で、顧客が要望する空間(席)の嗜好を熟知していた。屋外席の要望がほとんどないことに気づいた初代は屋外席をふさぎ、窓際席の要望が増えてきたことに気づいた初代・2代目は屋外席を復活させた。

基本的に改築はこのような顧客の空間嗜好を反映したものだが、その嗜好自体が変化していくのにも理由があった。環境法規に目を向けてみれば、1950年代は米国都市において排気ガスによる大気汚染がひ



図-3 1940年代後半，購入時の物件の様子。左手に見えるのが後にふさがれるテラス。写真提供：Gary Strothmann.

どく問題になっていた時代であることがわかり，屋外飲食は一般的に好まれなかったことは理解できる。¹⁵⁾ また，主要な顧客らは店の西側に広がる郊外住宅地に住んでおり，この地域の住宅は開発年代（19世紀末～20世紀初頭）の流行を反映してそれ以前の住宅で一般的であった「ポーチ」という住宅前面の屋外飲食などが可能な空間をもたない傾向にあった。かわりに道路からのセットバックを大きくとり，芝生の前庭をもつものが圧倒的に多く，このような住宅で暮らす郊外住民がテラス・ポーチ・パティオなどで飲食を慣習的に好まなかった可能性は高い。¹⁶⁾

このように，屋外飲食空間の廃止・復活を単に店主の嗜好の発露としてではなく，空間使用者の嗜好を通じて大きな空間的文脈のなかで考えることで，Boulevard Innを基点として周辺の郊外住宅地開発史や，より広範な米国都市環境史について議論を拡大する可能性が開かれる。

4. まとめと今後の課題

前述のように，一見些末な建築現象を多様な要因が折り重なって生成された文脈における演技であると思ふことによって，その土地にありふれた建築物・構造物を扱うヴァナキュラー建築学で取り扱い可能な時間的・空間的スケールを拡大することができる。ここから，様々な時間的・空間的スケールの事象と関連させながら議論を進展させる可能性が開かれる。つまり，ヴァナキュラー建築学は，より大きな時間的・空間的スケールを取り扱う景観・土木の研究とも接点を見出すことができる分野である。

本稿ではヴァナキュラー建築学における文脈という概念を通じて，時間的・空間的スケールの取り扱いに着目して議論を行った。そのため，北米を中心に発展した本分野と日本における諸分野（民俗学，生活学，建築・都市・景観史学）との関わりや，本分野と近隣分野（文化地理学，日常生活研究，歴史保全学，物質文化研究）との関わりについては本稿において詳しく議論していない。また，本稿はヴァナキュラー建築学の網羅的なレビューにはほど遠い



図-4 1970年代のパティオの様子。写真提供：Gary Strothmann.

ものである。日本語での文献はほぼ皆無であり，英語の文献においても日本の事例はほとんど取り上げられてこなかった本分野について，上記のようなテーマで基礎的な文献を整理しながら，日本の「文脈」に本分野を位置づけていくことが今後の課題である。

付録：Vernacular Architecture Studies の入門的文献

・論文誌

Buildings and Landscapes (2007–現在)

Perspectives on Vernacular Architecture (1982–2005)

・概説的な文献

Upton D., Vlach, J.M. eds.: *Common Places: Readings in American Vernacular Architecture*, University of Georgia Press, 1986.

Oliver, P. ed.: *Encyclopedia of Vernacular Architecture of the World*, Cambridge University Press, 1997.

Glassie, H.: *Vernacular Architecture*, Indiana University Press, 2000.

Carter T., Cromley, E.C.: *Invitation to Vernacular Architecture: A Guide to the Study of Ordinary Buildings and Landscapes*, University of Tennessee Press, 2005.

Brown R., Maudlin, D.: “Concepts of Vernacular Architecture,” *The SAGE Handbook of Architectural Theory*, pp.340–55, C.G. Crysler, S. Cairns, H. Heynen eds., SAGE, 2012.

謝辞：Boulevard Innの調査について，お忙しい中複数のインタビューに応じて頂いた Gary Strothmann氏（3代目店主），Barbara Stein 女史（長年の顧客）に厚く謝意を表します。また，本稿は第19回 BinN セミナー「社会基盤と建築における都市形成史研究の可能性を考える」（2015年1月31日，東京大学）における発表・議論を基にしており，主催者の羽藤英二教授（東京大学），討議者の山口敬太助教（京都大学）及び議論にご参加いただいた皆様に感謝致します。

参考文献・註

1) Oxford English Dictionary: “vernacular, *adj.*, *n.*,” OED

- Online, Oxford University Press, 2015.
- 2) 例えば, Kniffen, F.: "Folk Housing: Key to Diffusion," *Annals of the Association of American Geographers* Vol.55, No.4, pp.549-77, 1965. 本論文の初出は地理学の論文誌だが, ヴァナキュラー建築学の基礎的文献として Kniffen, F.: "Folk Housing: Key to Diffusion," *Common Places: Readings in American Vernacular Architecture*, D. Upton, J.M. Vlach, eds., pp. 3-26, University of Georgia Press, 1986. にも収録されている。
 - 3) Mercer, E.: *English Vernacular Houses: A Study of Traditional Farmhouses and Cottages*, p.1, Her Majesty's Stationery Office, 1975. この定義は Upton D., Vlach, J.M.: "Introduction," *Common Places: Readings in American Vernacular Architecture*, p.xvi, D. Upton, J.M. Vlach, eds., University of Georgia Press, 1986); Carter T., Cromley, E.C.: *Invitation to Vernacular Architecture: A Guide to the Study of Ordinary Buildings and Landscapes*, p.8, University of Tennessee Press, 2005 などの基礎的文献においても再度議論されている。
 - 4) Upton, Vlach: 前掲書, xv.
 - 5) Rudofsky, B.: *The Prodigious Builders: Notes Toward a Natural History of Architecture with Special Regard to Those Species That Are Traditionally Neglected Or Downright Ignored*, p.13, Harcourt Brace Jovanovich, 1977.
 - 6) Goffman, E.: *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday, 1959. このほかに performance theory の基礎的な文献に, Austin, J.L.: *How to Do Things with Words*, Harvard University Press, 1962; Jakobson, R.: "Closing Statement: Linguistics and Poetics," *Style in Language*, T.A. Sebeok ed., pp.350-377, MIT Press, 1960; Bauman, R.: *Verbal Art As Performance*, Waveland Press, 1984; Turner, V.: *Dramas, Fields, and Metaphors: Symbolic Action in Human Society*, Cornell University Press, 1975 などがある。
 - 7) Performance theory of architecture が発展していく経緯は, Upton, D.: "Toward a Performance Theory of Vernacular Architecture: Early Tidewater Virginia as a Case Study," *Folklore Forum*, Vol.12, No.2/3, pp.173-96, 1979; Herman, B.L.: "Time and Performance: Folk Houses in Delaware," *American Material Culture and Folklife: A Prologue and Dialogue*, S.J. Bronner ed., pp.155-75, UMI Research Press, 1985; Williams, M.A., Young, M.J.: "Grammar, Codes, and Performance: Linguistic and Sociolinguistic Models in the Study of Vernacular Architecture," *Perspectives in Vernacular Architecture*, Vol.5 pp.40-51, 1995 などを追うことで理解できる。
 - 8) 当時の店の評判については地元の新聞が参考になる。例えば, Getto, D.: "Top 25: Milwaukee's Best Restaurants," *Milwaukee Journal*, p.1D, May 1, 1987.
 - 9) 建物の所有者や改変履歴を調査するには, Building Inspection and Safety Engineering, City of Milwaukee, 4300-06 West Lloyd Street. Premises Record #73-0101, microfilm, Development Center, Milwaukee など, 市の開発局に出された届出を用いた。
 - 10) Boulevard Inn の場所としての意味を理解するために, 筆者は 2014 年 3 月~5 月にかけて 3 代目当主 Gary Strothmann 氏と長年の顧客であった Barbara Stein 女史にオーラルヒストリー・インタビューを行い, それを地元新聞 (*Milwaukee Journal*, *Milwaukee Sentinel*, *Milwaukee Business Journal* など) と併せて資料として用いている。
 - 11) Space と place の区別については, Cresswell, T.: *Place: An Introduction*, Wiley, 2014 が簡潔で理解しやすい。カルチュラル・ランドスケープ研究や場所研究の例は多いが, 代表的なものに Jackson, J.B.: *Discovering the Vernacular Landscape*, Yale University Press, 1984; Tuan, Y.: *Space and Place: The Perspective of Experience*, University of Minnesota Press, 1977 などがある。
 - 12) 米国の郊外化については文献が大量にあるが, 主なものに Jackson, K.T.: *Crabgrass Frontier: The Suburbanization of the United States*, Oxford University Press, 1985; Hayden, D.: *Building Suburbia: Green Fields and Urban Growth, 1820-2000*, Pantheon Books, 2003 などがある。ミルウォーキーの郊外化については, Gurda, J.: *The Making of Milwaukee*, pp. 321-322, Milwaukee County Historical Society, 1999 に詳しい。
 - 13) 交通とミルウォーキーの産業都市化の経緯については, Gurda, 前掲書, 108, 127; を参照。中西部の産業都市を結ぶ Chicago, Milwaukee, and St. Paul Railroad については Hayes D.: *Historical Atlas of the North American Railroad*, pp.144-45, University of California Press, 2010 などの文献がある。ネイティブ・アメリカン時代からの交通路の変遷については Lapham, A.: "Ancient Works in the Vicinity of Milwaukee," *Antiquities of Wisconsin*, plateIII, Smithsonian Institution, 1855; Brown, C.E.: "Archeological History of Milwaukee County," *Wisconsin Archaeologist*, July 1916 (Gurda, T 前掲書, 7 に引用); Kranyecz, M.: "Map of Milwaukee County, Wisconsin," Ribbe & Hey, 1929 などの地図を用いた。
 - 14) この改築の事例を調査する際, 市の開発局に出された届出のほかに, 市立図書館に所蔵されていた図面 Milwaukee Public Library, Wisconsin Architectural Archive, Boulevard Inn—Restaurant Addition Working Drawings, October 25, 1950, 304/20 と 3 代目店主から譲り受けたスナップ写真を用いた。
 - 15) 顧客が屋外席を好まなかったことはオーラルヒストリーで言及されている。米国の環境規制については Office of Mobile Sources: "Emission Facts," p.1, United States Environmental Protection Agency, 1999; Jacobson, M.Z.: *Air Pollution and Global Warming: History, Science, and Solutions*, 2nd ed., pp.175-85, Cambridge University Press, 2012 を参照した。
 - 16) この地域の住宅はよく保存・書面化されており, その写真は多数州の歴史協会にアーカイブされている。例えば, National Register of Historic Places, Washington Highlands Historic District, Wauwatosa, Milwaukee, Wisconsin, 89002121; Wisconsin Historical Society, Wisconsin Architecture and History Inventory, Milwaukee, Wisconsin, 117341, 114267, 114332, 118130, 116248, 31872 など。また, 戦後の住宅の傾向として, 排気ガスを嫌ってポーチが衰退したことは Dolan, M.: *The American Porch: An Informal History of an Informal Place*, p.225-56, Lyons Press, 2004 などで述べられている。